別紙第２

担当日：令和２年２月２３日（日）

医療機関名　担当医等	並木病院　赤津拓彦他
受診患者数	２９　　名
発熱患者数（３７度以上）	２２　　名
呼吸器症状患者数（鼻汁、咽頭痛、咳嗽、喀痰、呼吸困難他）	２０？　名

診察を終えての印象（特記事項）：

２９名の患者中、２２名が発熱でした。年齢層は２０－５０台が大半。多くの患者様はインフルエンザが心配での受診でした。新型コロナが心配は少数派でした。１名がインフルエンザＢで、他は陰性です。３３歳男性の発熱で左背部聴診上ラ音聴取が１名で胸Ｘ線、ＣＴにて左下肺野浸潤影、右下肺野も小さなすりガラス影あり。マイコプラズマ陰性で、白血球９０００位、ＣＲＰ３程度でした。診察は標準予防策で対応していました。現状ではコロナだっととしても市中肺炎としてしか対応はできません。市中肺炎と見なし、シタフロキサシン２Ｔを投与、経過観察が必要と考え、土曜日に再診を指示、来院して頂きました。内服３日後に解熱、それまでは３９度の発熱であったと。昨日は解熱、自覚的な体調も改善しておりました。肺野の浸潤影はまだ残存していましたが、白血球、ＣＲＰは低下しておりました。現時点では市中肺炎の診断です。この間、本人には自宅安静を指示、通勤はしませんでした。どこから漏れたのかわかりませんが、父親が肺炎とのことで、この方の子供達は保育園で差別的扱いを受けたと嘆いていました（園長先生から父兄の差別発言に苦言が呈せられたとのことでした）。このようなケースはＰＣＲの能力から考えてもPCR実施の適応例にはなりません。残りの患者は咽頭炎、感冒でした。それぞれ抗生物質、対症療法で観察しました。悪化し、再診した患者は報告を受けていませんので、皆無と思います（他に受診しているかもしれない）。他に１名、あまり外出をしない高齢者（同居の息子も電車等の通勤なし）の肺炎の入院も１名ありました。この患者は入院後、抗生物質等で加療し解熱しています。